

ネギベと病が多発生しています！防除を徹底しましょう。

[現在の状況]

- ① 5 月下旬現在、ネギベと病の発病度は県央、県西地域で平年より高く、県南地域では平年よりやや高い。発生地点率は全県で平年より高い（表 1）。
- ② 気象予報によると、向こう 1 か月の降水量は平年より多いと予想され、発生を助長する条件である。特に低温、多雨条件が続く場合には発病の進展に注意が必要である。

表 1 5 月下旬のネギベと病の発生状況

地域[調査地点数]	発病度 ¹⁾		発生地点率 (%)	
	本年(順位) ²⁾	平年値 ³⁾	本年(順位) ²⁾	平年値 ³⁾
県央[2]	17.5 (1)	2.1	100 (1-2)	15
県南[2]	5.0 (3)	2.0	100 (1)	30
県西[4]	6.3 (1)	1.7	100 (1)	31
全県[8]	8.8 (1)	1.9	100 (1)	28

1) 発病度：病斑をもとに算出した数値、最小値は 0 で最大値は 100 となる。

2) 順位：本年を含む過去 11 年間における本年値の順位。

(1-2 は 1 位から 2 位まで同じ数字であることを示す)

3) 平年値：平成 26 年～令和 5 年の平均値

[防除対策]

〈作型共通〉

- ① 伝染源となる発病株や被害残渣は、圃場外に持ち出して適切に処分する。
- ② 薬剤散布は、必要に応じて展着剤を加用し、散布むらのないよう丁寧に行う。
- ③ 前年多発した圃場では発生状況に注意する。また、被害残渣中で孢子（卵孢子）や菌糸の形で越冬し、次作での伝染源となるため、多発した圃場では連作を避ける。

〈夏ネギ〉

- ① 発生が少ないうちに、表 2 を参考に薬剤を散布する。なお、収穫前日数等に十分注意する。
- ② 薬剤散布後は発病状況を確認し、効果が得られない場合は追加防除を行う。その際には薬剤感受性の低下を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

〈秋冬ネギ〉

- ① 発病が圃場全体に広がると、薬剤の防除効果が劣る場合があるため、初期防除に重点をおき表 2 を参考に薬剤散布を行う。
- ② 多湿条件や多肥、肥料不足は発生を助長するので排水対策をしっかりと行い、適正な肥培管理に努める。



写真1 初期症状



写真2 多発圃場

表2 ネギのべと病に登録のある主な散布薬剤（令和6年5月15日現在）

薬剤名	希釈倍数 (倍) ¹⁾	使用時期	本剤の 使用回数	有効成分の 種類	同作毎の 総使用回数	FRAC コード ²⁾
ジマンダイセン水和剤	600	収穫14日前まで	3回以内	マンゼブ	3回以内	M03
ダコニール1000	1000	収穫14日前まで	3回以内	TPN	4回以内（但し、 土壌灌注は1回以 内、散布及び無 人航空機散布は 合計3回以内）	M05
フォリオゴールド	800 ～1000	収穫14日前まで	3回以内	マラキシル及び マラキシルM	5回以内（但し、 種子への処理は1 回以内、土壌混 和は1回以内、散 布は3回以内）	4
				TPN	4回以内（但し、 土壌灌注は1回以 内、散布及び無 人航空機散布は 合計3回以内）	M05
オロンディスウルトラSC	2000	収穫7日前まで	2回以内	オキサリプロリン マンジプロパミド	2回以内 2回以内	49 40
アミスター20フロアブル	2000	収穫3日前まで	4回以内	アゾキシストロビン	5回以内（但し、 粒剤は1回以内、 水和剤は4回以 内）	11
アリエッティ水和剤	800	収穫3日前まで	3回以内	ホセチル	3回以内	P07
ランマンフロアブル	2000	収穫3日前まで	4回以内	シアゾファミド	4回以内	21

1) 使用方法「散布」の登録内容

2) 殺菌剤耐性菌対策委員会（FRAC）により、殺菌剤の農薬有効成分を作用機構により分類し、コード化したもの

（注意事項）

- ・農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法・回数・注意事項等を確認のうえ使用して下さい。また、薬剤散布の際は、周辺作物への飛散（ドリフト）に十分注意して下さい。